

森 良太(上智大学)

カントはキリスト教の教会について、彼自身の哲学上の立場からどのように捉えているのであろうか。彼は1793/1794年の『単なる理性の限界内の宗教』(以下、『宗教論』)の第三篇において、複数の教会概念を呈示している。第一にカントは一般的な「見える教会(die sichtbare Kirche)」の概念を表す。これは「経験の制約に基づいた特定の教会形式を必要とする」教会として定義されている。つまりこの教会は経験世界における認識対象としての可視的な組織体である。同時にこれは、歴史上で脈々と続いてきた伝統的な教会としても意図されている。

その一方ではカントは第二に、「見えない教会(die unsichtbare Kirche)」という字義的には上記とは対立する概念を併せて呈示している。これは「全ての人間の全体という理想に常に関係づけられる」理念としての教会といわれる。こうした理念であるが故に、この教会は経験世界での可視的な認識対象とはならず、不可視的だとされるようである。さらにかかる見えない教会は、「人間が建設すべきいかなる教会の原像(Urbild)」とも説明されている。つまりこれは原像として理性的観点から目指すべき、純粋理性信仰に基づく教会なのである。また同時にこれは、感性的観点からは可能的経験の対象とはならない教会でもある。そしてかかる教会が、特に「神の道徳的立法下での教会」といったような文脈で述べられる場合には、「倫理的公共体(ein ethisches gemeinsames Wesen)」と呼ばれることになる。

ところがカントは興味深いことに、見えない教会を「真に見える教会(die wahre sichtbare Kirche)」という逆説的な概念を以って言い換えている。これにはどのような意図があるのであろうか。そもそも見えない教会が「真に見える」こととは、矛盾を犯すものではないのか。さらにこうした可視性をめぐる複数の教会概念の諸様相は、カントの哲学上でいかなる意義を示すものであろうか。本発表は、かかる問いに対する回答を試みるものである。

まず着目されるべき点は、カントが見えない教会のあり方を「倫理的公共体という決して達成できない崇高な理念」として述べていることである。ここでのカントの趣旨は、見えない教会(見えない倫理的公共体)は目指すべき原像であると同時に、経験的世界ではあくまで到達されることのない原像である、という点に存するようである。したがって人間にとっての見えない教会／倫理的公共体という原像には、理性的観点からみた権利上の当為性と、感性的観点からみた事実上の到達不可能性が同居していることになる。

そうした二義性の背後には次のようなカントの段階的な論理がひそんでいるようである。曰く、見える教会の本質とは、本来的な教会(倫理的公共体)が実現する為の暫定的な「乗り物(Vehikel)」に過ぎない。やがて純粋理性信仰は、歴史的信仰の感性的な「乗り物」から解放され、教会も可視的な儀礼形式に則った伝道手段がなくてもやっつけられるようになる。けれどカントは、見える教会がその感性的な儀礼を脱ぎ捨てて、純粋理性信仰にのみ依拠する「真に見える教会」へと移行していくものと考えているようである。

こうしたカントの議論の強調点はどこにあるのであろうか。就中、なぜカントは同一の教会概念に対し、見えない教会と「真の見え

る教会」という二義的な説明方式を付与したのであろうか。

本発表ではこの問題を、悪という特定の観点から吟味してみたい。そもそも『宗教論』第一篇によれば、人間とは「根元悪(die radikale Böse)」といわれる悪への性癖を有する存在者である。その性癖とは道徳的秩序を転倒させ、全ての格率の根拠を腐敗させるものである。人間は根元悪を根絶することはできない。但し同書第三篇によれば、人間が悪に抵抗するには個人のレヴェルでは限界があるからこそ、神の下で力をひとつにして悪に抵抗するような倫理的公共体の建設が必要であると説かれている。そしてカントによれば教会に所属する構成員の本来的な働きとは、善的な人格統合に向けた協働である。故にカントにあっては、こうした構成員の善的統合を阻むものこそが、教会における根元悪と位置付けられることとなる。

他方で倫理的公共体とは、見えない教会という観点からみられた場合には、「人間には達成されない理念」であったはずである。その理念に到達するためには、根元悪を完全に根絶しなければならない。しかしこれは人間には不可能である。そこでカントは現実的な着地点を求めることとなる。すなわちカントは、根絶できない根元悪に絶えず抵抗しつつ、人間の共同体に為し得る限りで倫理的公共体に接近していく働きの内に現実解を見出すようである。

こうしたカントの立論は、今般の可視性をめぐる教会概念の議論にどのような連関をもち得るのであろうか。発表者はこれに関し、悪に抵抗する共同的な働きの内に、教会の可視化の契機が含意されているものと推測し、その詳細を論じていく予定である。加えて発表者は、その過程における主戦場が、見える教会における儀礼の場であると見据えている。カントは『宗教論』第四篇において、儀礼の場こそが教会において虚偽の悪が蔓延する空間であると捉えているからである。本発表ではそうした儀礼の場を起点にした共同抵抗の契機も、併せて提起していくつもりである。そしてこれらに関わる究明が、カントが提起する純粋理性信仰に基づく「真の見える教会」の出来とも、軌を一にすることを見込んでいる。

さらに本発表ではこうした論究を、象徴という別の側面からもサポートしていくことを試みる。これは主題的には、1790年の著作『判断力批判』の第59節「道徳性の象徴としての美について」において扱われる論点である。ここでカントは、象徴は理念を類比という媒介によって間接的に表示すると述べている。発表者はこの論点を今般の教会論の文脈に敷衍しつつ、カントの教会論の独自性を象徴というあり方からも照射していきたい。

本発表は上述の事柄を踏まえ、可視性をめぐる観点からカント固有の教会概念の諸様相を浮かび上がらせることを最終目標とするものである。